横手税務署長賞

百歳の誕生日を祝って

横手明峰中学校　佐藤　悠里

先日曾祖母が百歳の誕生日を迎えた。同じ頃テレビでは、関東大震災から今年で百年と報道されていた。一九二三年、死者・行方不明者、推定十万五千人の関東大震災が起こった。当時の写真を見ても被害のすごさが伝わってくる。曾祖母は、その年に生まれ百年生きてきた。大正から令和へと四つの時代を越えてきた曾祖母の目に、今の社会はどう映っているのだろう。私は、曾祖母の生きた日本の百年に興味をもち、調べてみることにした。

関東大震災が起こった二年後の一九二五年、民主主義の根幹となる普通選挙法がようやく成立した。といっても満二五歳以上の男性だけに選挙権が与えられ、女性の選挙権が認められたのは二十年後の一九四五年になってからだった。他にも百年前の大正時代は職業婦人が登場し、少しずつ女性が活躍してきた時代だということが分かった。さらに大正から昭和にかけては、戦費調達のために増税が続いていた時代だったことが分かった。一九四〇年には現在の税の仕組みに通じる源泉徴収制度がつくられたが、これも当初は戦費を効率的に集めることが目的だったようだ。税という現在との共通点を見付けた私は、その後の税の変化が気になり調べてみることにした。

私の税のイメージで最初に浮かぶ消費税が導入されたのは平成になってからだった。当初三％だった消費税も現在は十％に変わっている。この消費税は社会保障のために使われている。医療や年金、介護など私たちの生活を守るために欠かせないものだ。百年前は主に戦費調達のために集められていた税金も百年の間に様変わりして、国民のために使われるようになった。以前、曾祖母と暮らす祖父が、退職後にお金に困らずに生活できているのは、年金をもらっているおかげだと話していた。この年金の一部にも国民から集めた税金が一部に使われている。医療、年金、介護、曾祖母が百年目の記念すべき日を迎えられたのは、この国民を支えるために進化してきた税の仕組みに他ならない。曾祖母が百歳の誕生日を迎えられたことに感謝するとともに、今後の百年も自分や自分の大切な人を守ってくれる日本の社会であってほしいと思った。

改めて、自分の身の回りに目を向けてみる。学校に行けば、エアコンの効いた部屋で学習ができる。大型のディスプレイやタブレットもあり、私たちの学びを保障してくれている。病気になっても高校三年生までは医療費を負担してくれる。今年、秋田を襲った集中豪雨　による自然災害などの際の復興の支援もしてくれる。税金がなければ、このようなことは望めない。今仕事をして税金を納める立場でない私は、納税者の方々への感謝しか言えない。しかし、今こうして支えていただいている分、大人になってからは誰かを支えられることを誇りに思える自分になりたいと思っている。こう感じさせてくれた曾祖母に百歳の「おめでとう」と「ありがとう」を伝えたい。